Japan Society of Histochemistry and Cytochemistry (JSHC)

I－45

胸腺リンパ球の比重，並びに TdT 反応パターンの加令に伴う変化

川上勝彦，高橋研一，山形健三
（大阪市大・解剖）

正常ラット胸腺リンパ球に重層遠心分離法による細分画を行い、各分画におけるTdT、リンパ球表面マーカーの加令に伴う変化を検討した。（方法）生後2W，12W，8ケ月のSD系ラット胸腺リンパ球を，lymphoiyte M(Cedarlane Lab)で分離し、単一細胞浮遊液を作製後、比重おのおの1.078(分画III)、1.072(分画II)、1.064(分画I)のFico-11 Paque液上に重層し、4000RPM、20分遠心。各分画に対し、酵素抗体法を施行した。抗体として、抗TdT(BRL)，抗リンパ球表面マーカー(Sera Lab)を用いた。500個の有核細胞を大・中・小型に分類し、陽性率・陰性率を%で表わした。又、各分画はノマルスキー微分干渉顕微鏡でも観察した。（結果）1. 重層遠心分離法による分画I、IIは、大・中・小3種類のリンパ球III、IV(沈渣)は一部の中リンパ球以外ほとんど、小リンパ球からなる。2. TdTの染色パターンは、分画IがdiffuseIII、IIIがmixed (diffuse <circular)、IVはcircularであった。3. 分画IVは、他の分画に比し、TdT^{+}小リンパ球が最も多く、TdT^{-}小リンパ球が最も少なかった。

I－46

ヒト白血病及び悪性リンパ腫由来長期培養細胞株の細胞化学的研究（V）Bリンパ球系列細胞の分化段階における酵素活性 ── 酸性フオスファターゼ活性の意義

○森川　茂，原田孝之，長崎真琴，
加藤太二，森川景子
（島根医大・病理，同耳鼻咽喉科，同内科）

白血病・悪性リンパ腫に関する研究の近年の進展は，免疫細胞学的手法に多くよるものとされてはいるが，酵素組織化学的手法もその重要性を失なってはいない．Bリンパ球はリンパ幹細胞から，B前駆細胞，Bリンパ球を経て最終的に形質細胞，抗体分泌細胞へと分化することが知られている．我々はBリンパ球系列の各分化段階に相当した免疫学的表現型を有するヒト由来長期培養細胞株を対象にその酵素学的プロフィルを検討した．

細胞株は，幹細胞2株，B前駆細胞2株，白血病，悪性リンパ腫由来9株，トランスフォーム芽球株4株を含むB細胞株13株，骨髄腫細胞株を含む抗体産生株4株である．酵素活性はエステラーゼ，フオスファターゼ群を中心として検索した．

一般に低分化段階の細胞群は低酵素活性を示した．酸性フオスファターゼ活性は，成熟B細胞，抗体産生細胞株で，高低の2群に分別しえた．後者の群では胞体内抗体の出現率と酵素活性の高さが平行した．抗体産生の低いARH77株を発癌プロモータ処理をすると，成熟形質細胞の出現と高酸性フオスファターゼ活性陽性細胞の出現をみた．両者の活性化の平行を示唆するものであった．

NII-Electronic Library Service